

【にんげん部門（中学生の部）・優秀賞】

小さな命

札幌大谷中学校 2年 金澤 神音

アマガエルのぴょん子と出逢ったのは、四年前のとあるキャンプ場でした。最初の頃は、食事も庭の虫を捕まえてあげていましたが、飼育の勉強をして行く内に人工フードに切り替えたり、ケージ内の環境を整えて、冬眠をしなくても生きて行ける様になりました。

人に慣れたぴょん子は跳ねながら手に乗り、指からご飯を食べ、愛嬌のある可愛い表情をして、家族や友達、知り合いから人気で癒やし楽しませてくれました。

時が経ち、晩年は皮膚の艶も衰え、食欲も無くなり介護生活も数ヵ月続きましたが、表情は変わらず明るく、家族を癒やし続けてくれました。私はそんなぴょん子の姿を見て、いつ死ぬのか分からない不安と、もしかしたら一生死なないのではないかという希望が心の中にあり、とても複雑でした。勿論それは私が恐れていた事から逃げていただけでした。今年の六月初め、永眠したぴょん子は、私の手の平で最期の力を振り絞り、一回跳ねた後動かなくなりました。

初めは何処にでも居るアマガエルだったのかもしれませんが。しかし私自身の受験や入院や心の葛藤等があり、四年間苦楽を共にして私の心を支えてくれたぴょん子は、家族であり友達であり、一心同体と言えます。そこには確かに種族を超えた絆がありました。

ぴょん子には命を預かる責任の重さや尊さ等、様々な事を学ばせて貰いました。そして、その「小さな命」から大きな幸せを教えて貰いました。正直、今迄私は生き物を飼う、何かを育てる、その意味を分かっていたつもりになっていました。生き物、ペットが死ぬということを経験して、それをただ一つの出来事として受け入れ、活かそうとしていなかったことに気づかされました。

何度有難うと言っても足りない位、私の心に大きな変化を与えてくれました。

いつまでも、感謝しています。